

二松学舎大学人文学会 第一二二三回大会 要旨集

大会タイムスケジュール

12
..
50

開会挨拶

〈研究発表〉 於 二〇一教室

13
..
00

14
..
00

発表者① ② (石塚氏、王氏)

〔10分間休憩〕

14
..
10

15
..
10

発表者③ ④ ⑤ (鄭氏、鈴置氏)

〈講演〉

於 二〇一教室

15
..
30

17
..
00

早稲田大学文学学術院教授・山本聡美氏

「愛執の図像学——中世説話画に描かれた愛と発心」

17
..
00

閉会挨拶

〈研究発表〉

石塚聖人(国文学専攻博士前期課程一年)

「近世における「モノノケ」の語義・表記」

「モノノケ」という語は、現在では「物の怪」と表記されることが多く、また、それらの文脈においては、妖怪、幽霊などを意味していることがほとんどである。しかし、古代において「モノノケ」とは「モノ」の「ケ」、つまり霊的存在(モノ)の発する気配(ケ)を意味していた。また、古代・中世においては疾病などを引き起こす原因とされてきた霊のことであり、それらの霊によって引き起こされた心身の病も「モノノケ」と呼称されていた。

これらのことから、「ケ」を「怪」と表記するのは語義と齟齬しており、表記の面においても、古代から現代にかけて変化が生じていることが分かる。特にこの変遷は、当時の史料に鑑みるに中世後期から近世初期にかけて起こったことであろうと推測できる。

しかし、現在の「モノノケ」研究の多くは『源氏物語』や『栄花物語』、『大鏡』などの撰関期にかけての文献が対象になっており、中世後期から近世にかけての体系的な研究はあまり存在していない。

本発表は、当時の史料から近世期に「モノノケ」がどのように理解され、受容されていたかを検討し、いまだに判然としない箇所が多い「物の怪」と化した「モノノケ」像の原点を考察していく。

王学勤(国文学専攻博士後期課程一年)

「『杜子春』における遁世思想への考察」

『杜子春』は大正九年六月に執筆され、七月に鈴木三重吉の主宰する児童文学雑誌『赤い鳥』の創刊号に掲載された。『杜子春』にまぐって議論は主に三つの傾向が存在している。第一は原典『杜子春伝』との比較である。第二は人々の薄情への風刺と正しい人間性を提唱することである。第三は芥川龍之介の経歴を結び、創作意図を再確認することである。今回の発表は三つの傾向以外に『杜子春』における遁世思想について考察したい。

この遁世思想は主に三つの源がある。まずは『杜子春伝』が書かれた時代背景とその小説の発展の脈絡から見れば『杜子春伝』に色濃く遁世思想が含まれていること。芥川龍之介の『杜子春』はその思想を受け続いでいた。次は陶淵明と隱遁の生活に対する芥川龍之介のあこがれである。桃の花で囲まれた家のイメージを借り、芥川龍之介が翻案した時に『桃花源記』からの遁世思想を『杜子春』に導き入れた。その影響の問題である。最後に芥川龍之介の生活経歴、手紙、作った漢詩などから見る、芥川龍之介の個人的な気質の問題もある。

『杜子春』における遁世思想を深く掘り、新たな読み方を提供したい。

鄭成程（国文学専攻博士前期課程二年）

「日中二次元文化から見る新語・流行語の発展」

新語・流行語はその時代における社会を反映することができる（蔣，2018・71）。したがって、新語・流行語の分析を通じて、その当時の世相が把握でき、今後の社会動向が予想できると言える。そして、インターネットの普及により、二次元文化に関心を寄せる人は増える一方である。そこから出てくる言葉も、世の中の一般の人々及び社会にある程度影響を与えるといっても過言ではない。

本研究は、「Google Trends」と「百度指数」を用いて日本と中国の二次元文化に現れている新語・流行語のうち、意味や使い方が近い語彙を比較し、それらの言葉の語源と語彙間の影響及び社会に与える影響を説明することにより、相互の言語文化・差異などを明らかにしたい。その新語・流行語の発展から、日中両国の文化交流の傾向を展望し、将来、日中両国の文化交流を始め、相互理解を踏まえた上での二次元産業の発展をも促すことができるのではないかと考えている。

鈴置拓也（中国学専攻博士後期課程一年）

「中村敬宇の文章論について」

中村敬宇は、幕末期には御儒者として、明治維新後は啓蒙家・教育者として活躍した人物であり、彼に関する研究も数多い。しかし、敬宇の文章論についての研究はほとんどないと言って良い。一方で、幕末明治期の漢文学、殊に文章論についての研究も乏しい。

敬宇の文章論は、他の儒者同様「道」と深く関係している。簡潔に言えば、その学習方法は「道」の載せられた聖賢の書を熟読してその「文理」を胸中に蓄えるというものであり、作文法はその蓄えた「文理」を「平常の説話」の如く字句に拘らずに直接的に表現するというものであった。

「平常の説話」の如く作文をするというのは、彼の英学の素養とも密接に関わっていると考えられ、洋学流入全盛期である幕末明治期における特徴的な文章論と言える。

本発表では、学問形成期から明治以降にいたるまで、敬宇の生涯に渡る文章論について、文稿あるいは文集を中心に用いて考察を試み、さらに、それが日本の近代化過程において何らかの役割を果たしたのではないかという新たな課題へと繋げたい。

〈講演〉

〔演題〕

愛執の図像学——中世説話画に描かれた愛と発心

〔講師紹介〕

早稲田大学文学学術院教授 山本聡美氏

一九七〇年宮崎県生まれ。専門は日本中世絵画史。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。博士(文学)。大分県立芸術文化短期大学専任講師、金城学院大学准教授、共立女子大学教授を経て、二〇一九年から現職。芸術選奨文部科学大臣新人賞、角川財団学芸賞、上野五月記念日本文化研究奨励賞。著書・共編著に、

『九相図資料集成 死体の美術と文学』(共編、岩田書院、二〇〇九年)

『九相図をよむ 朽ちてゆく死体の美術史』(KADOKAWA、二〇一五年)

『病草紙』(共編、中央公論美術出版、二〇一七年)

『闇の日本美術』(筑摩書房、二〇一八年)

『中世仏教絵画の図像誌』(吉川弘文館、二〇二〇年)など多数。